

序

石神遺跡は明治35・36年（1902・1903）に、異形の石造物が出土した地として知られています。これらは出土後すぐに「須弥山」および「石人像」と呼ばれるようになり、斉明朝の時代に造られたものと考えられるようになりました。これらの石造物は、その後東京帝室博物館に寄贈されたのですが、出土地とその周辺では、昭和初期に2回の発掘調査がおこなわれました。昭和4年（1929）の発掘調査では、飛鳥小学校とその周辺で発見した「石葺」を飛鳥浄御原宮の遺構であると考えました。いっぽう、昭和11年（1936）の発掘調査は石田茂作氏（東京帝室博物館）が実施したもので、石造物の性質をあきらかにすることが目的でした。このときの調査では、地表下約3尺の深さで、飛鳥時代の石組溝や石敷などを相次いで発見しています。この成果を受けて、石田は後年、この地が『日本書紀』斉明天皇5年条に見える「甘樞丘東川上」にあたり、須弥山を立てて陸奥と越の蝦夷を饗応した場所であると考えたのです。「斉明朝の饗宴場」という石神遺跡のイメージは、原型がこのときにつくられたといえます。

石田氏の発掘調査から数十年を経て、奈良国立文化財研究所（奈文研）が石神遺跡の発掘調査に着手したのは、昭和56年（1981）のことです。その第1次調査には、石造物が出土した小字石神の水田が選ばれました。小字名に因んで、「石神遺跡」という名称が定着したのもこの頃です。その後、発掘調査は平成20年（2008）まで続き、斉明朝の一大遺跡というイメージが定着していきました。調査が進むにつれ、7世紀前半から藤原宮期にかけて、大きく3度の改作がおこなわれたことや、斉明朝には東西2つの区画に分かれていたことがあきらかとなりました。

複雑な遺構と膨大な量の出土遺物に鑑み、その正式報告書は何冊かに分けて刊行することとなりました。本書はその第1冊で、第1次から第

4次までの発掘調査報告書です。この報告書を刊行するために、令和5年度には石造物出土地の再発掘調査も実施しました。これはこの水田でおこなった通算3度目の発掘調査であり、本書を刊行するために目下の課題を解決することが調査の目的であったと聞いています。この再発掘調査は、これまで未検出であった遺構を確認するにとどまらず、遺跡全体の構造や変遷を考え直すきっかけにもなりました。

石神遺跡の研究にはおよそ120年の歴史がありますが、継続的な発掘調査によって、今も少しずつ新しい事実があきらかとなりつつあります。本書で報告するのは発掘調査成果の一部にすぎませんが、飛鳥地域における新たな研究の礎となることを願ってやみません。

最後になりましたが、石神遺跡における発掘調査の実施にご協力いただいた奈良県・奈良県教育委員会と明日香村教育委員会をはじめ、調査等にご理解いただいた大字飛鳥にお住まいの皆様、ご指導・ご助言を賜りましたすべての方に対し、厚く御礼を申し上げます。

2025年3月

奈良文化財研究所
所長 本 中 眞